

生活記録と〈運動〉——シンポジウムの報告

はじめに

中谷 いずみ

近年、1950年代におけるサークル運動の可能性や課題があらためて検討されており、その調査研究のための基盤資料としてサークル誌が注目を集めています。当時の運動に参加した人びとは、しばしば自分たちの活動や主張を伝え、表現し、繋がるための媒体としてサークル誌を作成しました。詩などの文学形式をとるものからアジテーションのようなものまで、そこに掲載されたさまざまな文章は、当時の〈運動〉が「書くこと」と密接に結びつくものだったことを教えてくれます。

そしてこの時期、まさに「書くこと」を中心とする運動として広がったのが「生活記録運動」でした。自分たちの「生活」を書き、話し合うことで問題を対象化するこの運動は、自己教育的側面を持つ点で同時代のサークル運動とは少し異なる性格を持つものでもあります。では、1950年代において「生活記録運動」はどのようなものであり、また後の〈運動〉にどのような影響を与えていったのでしょうか。

2013年11月2日、第7回戦後文化運動合同研究会の特集企画として「生活記録と〈運動〉」と題するシンポジウムを開催し、榊原理智氏・東村岳史氏による報告と辻智子氏・道場親信氏によるコメント、そして聴衆との質疑応答を通して議論を深めました。ここでは、報告者2名による報告、コメンテーター2名によるコメントを掲載します（ただし諸論は、当日の報告やコメントを基に討論の内容を反映させる方向で加筆修正しています）。

諸論に入る前に、当日の司会と基調提起を担った立場から、各氏の紹介と報告内容について—これは今回提出された諸論の交差する地点を意識しながら、そこで提起された問題について私自身の見解も含めて言及することになります—簡単にふれておきたいと思います。

今回のシンポジウムでは「生活記録と〈運動〉」をさまざまな角度から照射するために、異なるフ

ィールドの研究者に登壇を依頼しました。報告者である榊原理智氏は日本近代文学を専門領域とし、太宰治や武田泰淳の作品、占領期の検閲や1950年代の翻訳の問題等について研究されています。今回のテーマに直接関わるものとしては、2007年11月に『日本文学』（第56巻11号）に発表された『『山びこ学校』というユートピア—一九五〇年前後における〈書く主体〉の創出』があげられます。同じく報告者である東村岳史氏は歴史社会学を専門領域とし、『戦後期アイヌ民族—和人関係史序説—一九四〇年代後半から一九六〇年代後半まで』（三元社、2006年）など、近代日本におけるアイヌ民族と和人の関係や、アイヌ民族・北海道民の表象等について研究されています。今回のテーマに直接関わるものとしては、2012年12月刊行の『原爆文学研究』（第11号）に発表された「『生活記録』から『証言』へ—『長崎の証言の会』創設期と鎌田定夫』があげられます。コメンテーターの辻智子氏は社会教育学を専門領域とし、『紡績女子工員生活記録集』（日本図書センター、2002年）の編集や解説執筆等、1950年代の紡績工場で働く女性たちによる生活記録運動を研究されています。同じくコメンテーターの道場親信氏は、日本社会科学史・社会運動論を専門領域とし、『占領と平和—〈戦後〉という経験』（青土社、2005年）や『抵抗の同時代史—軍事化とネオリベリズムに抗して』（人文書院、2008年）など、1950年代のサークル文化運動、そしてそれ以後の社会運動や市民運動等について研究されています。そして司会と基調提起を担当した中谷いずみは、日本近代文学を専門領域とし、『その「民衆」とは誰なのか—ジェンダー・階級・アイデンティティ』（青弓社、2013年）など、社会運動における「民衆」表象やジェンダー表象の問題について研究しています。このように、研究対象も学問的ディシプリンも異なる登壇者たちの議論は、時に接合し、

12 生活記録と〈運動〉—シンポジウムの報告

時に食い違い、互いの論を触発し合うものとなりました。

榊原氏の報告は、『思想の科学』初期における鶴見俊輔の記号論の可能性について、思想的背景を踏まえつつ論じたものです。鶴見記号論が秘めていた理論的可能性として、権力が言語を通してどのように作用するかを見極める視点や、記号の使い手とすることで主体を媒介へと変換する視点の潜在を指摘するこの報告は、構築主義的展開の可能性を垣間見せる思想として鶴見記号論を再浮上させます。更に、生活綴方運動や生活記録運動にアイデンティティ・ポリティクス的側面を見る榊原氏は、主体の同一性を脅かす記号論の可能性それ自体がそれらの運動の障害になり得ることを指摘し、そこに鶴見の思想が変容していく一要因があったのではないかと論じています。この榊原氏の報告は、思想の論理に内在するあり得たかもしれない可能性を紡いでみせたという点で、極めて刺激的なものです。またそれに応じる道場氏のコメントは、一つの鶴見俊輔論ともいえるべきものになっています。道場氏は丹念に鶴見俊輔の発言を追ひ、「生活記録」に対する関心のありようを検証していきます。それらは、「指導者意識」を克服したリーダーへの注目、記録芸術運動との接続の可能性、アイデンティティ・ポリティクスとしての側面、近代的諸価値を揺さぶるような伝統と近代を結びつけた新しい主体の可能性を開く方向性、「書く」行為が物質化される場としてのサークルと素材としてのテキストへの関心、「思想の科学」のガバナンスにおける方法として整理されていますが、とりわけ興味深いのは、生活記録の方法で生み出されたテキストを通して「思想と主体の可能性を探る」ことに関心を持ったのではないかという指摘です。これは、「主体」という概念を解体する可能性を秘めた方法論からその概念を軸に据えた方法論へという、榊原氏が指摘する鶴見の思想変容の展開に適合するものでもあります。しかしコメントの末尾で道場氏が述べている「主体」と榊原氏が述べている「主体」の概念はずれているようにも見えます。この「主体」をめぐる問題は容易に解決できるものではありませんが、興味深いのは、東村氏の報告にもこの問題に関わるように思える点です。

東村氏の報告は、鎌田定夫を媒介に生活記録運

動的な要素を被爆者関連運動の中に見出すことで、生活記録運動の可能性を逆照射したものです。そこで指摘されているように、1960年前後になると「生活記録」は「実感べったり主義」と批判されていくのですが、東村氏は、鎌田の唱える「証言」がこうした批判を克服するものとして、体験や行動から芽生えた体験化された思想、生活に根差した思想を目指すものだったと指摘します。東村氏は非被爆者がどのように運動に関わり得るかという問題を提起しつつ、生活に根差した思想としての「証言」を「リアリティ／リアリズム」の強度の問題と捉え直し、そこに写真記録との重なりを見ることで、表現の「強さ」の功罪を指摘します。被害者の外傷を撮った写真のように「強すぎる」表現は運動として長続きしないのではないかと考える東村氏は、「証言」における文字記録運動が継続し、写真運動が停止してしまった理由にこの「強さ」を見るのです。この表現の「強さ」ゆえに〈運動〉が長続きしないという東村氏の見解は、たいへん示唆的なものです。このことと「生活記録」への評価が称揚から「実感べったり主義」批判に塗り替えられていくことの問題はパラレルであるように私には思えるのですが、そこに浮上してくるのは〈運動〉の対抗性をめぐる問題です。つまりある言葉や表象が対抗性を持つ運動の中に現れる際、それらが発揮する／してしまう効力の問題を抜きにして〈運動〉を考えることはできないのではないかという問いです。おそらくそれは、言葉の発信者や表象の担い手たちがそのつもりかどうかに関わらず対抗的性格を有する〈運動〉を考える上で避けられない要素であり、また言葉の発信や表象を担う者たちも意識的であれ無意識的であれ同時代の言説を受容し、それらを反復したりそこに亀裂をもたらしたりするという意味で言説の実践者であることを踏まえるならば、そこから逃れ得る純粋な「主体」というものは存在しません。辻氏はコメントで、生活記録運動の実践の中で書かれた文章を引用し、自分の言葉を外に出すことで自己内対話が生まれ、その軌跡が文字としてまた綴られていくような思考の実践として「生活記録」を捉えた上で、世間やメディア、知識人たちの発言が実践の展開に与えた影響を考えねばならないと指摘しています。シンポジウムの全体討議でも、言説が運動主体に与える影響を考慮す

る必要が指摘されました。これらの議論は、対抗性を持つ〈運動〉の有効性が当事者的立場から発せられた言葉やそれらに基づく表象に依拠したものである時、あるいはアイデンティティ・ポリティックス的側面が運動の有効性に関与する時、「主体」をめぐる問題の複雑さを回避して考えることはできないのではないかと、あらためて気づかせてくれるものでした。

では、「生活記録運動」は対抗性を有する〈運動〉だったのでしょうか。これは立場によって見解が分かれるところかもしれません。個人的には、「生活記録運動」という枠組みの中でというより、1950年代の言説空間において、「民衆」と呼ばれ得るような、権力中枢への対抗的存在を表象する役割を担ったという意味で、そのような〈運動〉の一つであったと考えています。私自身は、まさにメディアにおける言説やそこで形成される書き手の表象がどのように流通してきたかに注目し、「主体」（誤解のないようにいえば「行為体」ということになりますが）を制度や実践、言説の結果と見なすことで何が本質化されてきたのか、そこに潜む問題とは何かを問う立場から、権力中枢への対抗的存在の表象や〈運動〉におけるジェンダー表象の問題について論考を続けてきました。今回のシンポジウムで浮上した「主体」をめぐる問題は、さらにジェンダーや階級の表象に深く関わるものもあり、今後の議論が必要となるでしょう。

なお、今回の報告者とコメンテーターによる諸論の整理は、上記のような私自身の立場から行われたものです。それぞれの報告とコメントは整理しきれないほどの多岐にわたる論点を提起するものであり、どこに接合や闘争の地点を見出すかは、まさに読者に委ねられています。ここに掲載された諸論が呼応するテキストとして読まれ、更なる豊穡な議論をもたらすことを願っています。

（なかや いずみ・奈良教育大学）